

さて、イエスのところに母ときょうだいたちが来たが、群衆のために近づくことができなかった。そこでイエスに、「お母様とごきょうだいたちが、お会いしたいと外に立っておられます」との知らせがあった。するとイエスは、「私の母、私のきょうだいとは、神の言葉を聞いて行う人たちのことである」とお答えになった。（ルカ8：19～21）

主イエスの言葉と業には神の愛と真実が現わされていた。悩み悲しむ者には生きることに向かつて強い励ましを与えた。病に苦しむ者には確かな癒しを、悪霊に取り付かれた者には明るい解放を与えた。神が生きて働く「神の国」、即ち、人間回復のリアリティを示されたのである。民衆は主イエスの周りに群がり、救いを求めた。御言葉と癒しを求めて押し寄せる民衆のため、落ち着いて食事をする暇もなく、枕する所もないほどであった。主イエスの「神の国」の宣教は、ファリサイ派の人々には、自分たちが作った宗教体制を壊されることであり、また、主イエスへの民衆の敬意と信頼は、自分たちから民衆が離反することであった。彼らは、主イエスに敵対し、何とか抑え込もうと躍起になっていた。宗教的権力者たちからの迫害は強まり、危険な状態になっていた。

主イエスの故郷ナザレでは、母マリアやきょうだいたちは、故郷を去って「神の国」の宣教活動続ける主イエスの噂を聞いた。家族の者たちは、主イエスの過労と宗教的権力者からの圧力を心配して、宣教活動を止めさせ、ナザレに連れ返そうとした。行って見ると、主イエスの周りには民衆が群がり、近づくことができなかった。そこで、人を介して、「お母様とごきょうだいたちが、お会いしたいと外に立っておられます」と知らせた。母マリア、そして、弟はヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの4人がいた。また「姉妹たち」と書かれているので、複数の妹がいた。少なくとも、6人の弟、妹たちがいた（マルコ6：3）。家族が皆、主イエスの所に来たのではなく、母マリアと2、3人の弟が来たのであろう。「お母様とごきょうだいたちが、お会いしたいと外に立っておられます」という伝言を聞いて、主イエスは、「私の母、私のきょうだいとは、神の言葉を聞いて行う人たちのことである」と答えられた。この言葉は、肉親の関係を断ち切った言葉である。30歳の頃、ナザレを去って宣教活動を始めた時、主イエスは「血による肉親の関係を捨て、神の子の使命に立って、「信仰による愛の関係」という視点に立たれた。それが、神の言葉を聞いて行う人が、主イエスの母であり、主イエスのきょうだいであるという言葉になっている。けれども、主イエスは、信仰を同じくする者の家族的な集団を形成しようとしたのではなく、神の恵みを知り、互いに分かち合って生きる、自立した個々人になるということであった。聖霊降臨によって、信仰共同体・エルサレム教会が誕生した。それは、当然であるが、共同体を形成する時、ともすると、管理化による墮落が起きる。神の言葉を聞いて行う者は、真に自立した個人で、その者たちがキリストの教会を形成するのである。

主イエスは母、兄弟の関係を断ち切っているようであるが、十字架の下で、母マリアに「女よ、見なさい。あなたの子です」とヨハネと思える愛弟子を指して言い、彼に「見なさい。あなたの母です」（ヨハネ19：26～27）と言って、母マリアを託している。主イエスは母マリアを案じ、母子関係は切れていない。主イエスの弟ヤコブは、聖霊降臨後、信仰を得て、エルサレム教会の重鎮として、教会の形成に活躍している。